

## 中国における檔案の整理と檔案館

中原 ますゑ

### はじめに

中国において現在、古籍の整理とともに檔案の整理が積極的に進められている。古籍に関しては、すでに別の機会でその概要を紹介した<sup>\*</sup>。したがってここでは、檔案整理の現状にふれながら、あわせて一九八三年八月に訪問した北京の中国第一歴史檔案館、南京の第二歴史檔案館について、簡単にその沿革や特色、所蔵資料、活動状況その他をとりあげることとする。

ところで檔案というものは、中国における官署で保存している公文書を指すものである。つまり公の機関で保管されている各種の記録、文献類である。この檔案は、広い意味ではすでに殷周時代から存在しており、現在のいわゆる紙に記録された文書以外の形として、甲骨文、金文、石刻、木牘、竹簡や縑帛（絹布）等に記されたものを総称する。ただし、この用語が使

用されたのは、明末から清初にかけてであるといわれる。歴代の王朝は、それぞれ檔案庫を作り、檔案を保存して来た。例えば、漢代の石渠閣、宋代の架閣庫、元代の秘書監、明代の黃冊庫、皇史宬、清代の内閣大庫などと称されているものがそれぞれある。

しかし現在残っているものは、大部分が明代以降のもので、それ以前のは少ないとされる。

中国の各檔案館では、これら各種の檔案の収集、保管、整理、統計、鑑定、編さん、出版、閲覧利用等の業務を行っている。また、一般的に檔案という場合、現代のものまでを含むが、本文で扱うのは主として歴史檔案、すなわち檔案史料である。

### (一) 新中国成立以来以降の檔案の整理

ここですす、解放後中国の檔案整理についていえば、新政府

は、歴史文物、文化遺産の収集、保護などを科学文化事業の一環と考えて、これを重視し、それに伴って分散している解放前の檔案を集中して統一管理する必要があるとした。

そのための具体策として、一九五六年には「國務院關於加強國家檔案工作的決定」が出されている。そこには、①国により檔案の集中統一管理をする、②統一的な檔案の保存制度を確立する、③新中国成立以来の永久保存すべき檔案の整理をすみやかに、④各地に散在している革命歴史檔案、旧政權の檔案を収集する、⑤國家檔案局の指導的な役割を充分發揮させる、

⑥檔案業務推行のための組織機構を設立する、⑦担当者の養成をはかり、水準を高めることが急務であるという内容がもり込まれている。つづいて、一九五七年には「改進檔案資料工作方案」が出された。一九五九年現在、省、市、自治区に一五館、

県クラスの檔案館一二〇〇館が設置されている。一九六〇年に入って、國家檔案局により「省檔案館工作暫行通則」「県檔案館工作暫行通則」が出され、各クラスの檔案館の性格、方針、任務等が明確に定められた。一九六四年の時点で、省レベルのもの二一館、県のもの一五九〇館と増加している。中国文化大革命による一〇年間の空白ののち、一九七九年に國家檔案局が復活して、同年八月全國檔案工作会议が開催された。檔案業務の三年以内の回復、整頓、總結、提高という八字任務、つまり四つの業務について討議が行われた。これは中国文化大革命中被害を受け、散佚した檔案を収集し、整理し、まとめ、業務の向上をはかるということである。一九八〇年「國家檔案局關於開放歷史檔案的幾點意見」という規定が出て、一九四九年以前の

歴史檔案、すなわち、民国、明清時代のものを研究者に公開し、また革命歴史檔案は限定して利用させることが決められた。さらに、同年八月「關於加強對歷史檔案資料收集工作的通知」が公布され、収集業務を一層積極的に行うことが要請されている。一九八一年、檔案館は全國で二六六八館、職員は全部で一万五〇〇〇人に達している。一九八二年一月には、北京で國家檔案局の招集により再び全國檔案工作会议が開かれた。三〇〇〇人の関係者、担当者が参集し、そこでは文化大革命の束縛から解放されて檔案事業は新しい段階に入ったという認識に立ち、各クラスの檔案館は、檔案の研究、編さん、出版業務を強化し、担当者の質の向上、組織を確立することが再確認され、「檔案事業發展規劃（一九八三—一九九〇）」、「檔案館工作通則」の二つが協議された。それによれば、檔案館は、國家と党（中國共產党）の科学文化事業のための機構で、檔案の永久保存の基地であり、研究と利用のセンターであるとされ、さらに國家と党の眞実の姿を維持し、守るという重大な任務をもつという方針のもとに、これを集中統一管理し保存する。また利用者に提供し、編さん出版する。各種檔案館の協力によって檔案を充実にさせておくことなどが定められている。このように中国においては、檔案の管理その他は、國家によつて組織的に行われているわけであり、その点日本の場合とは相当に事情が違っている。一九八三年七月には、承徳で檔案館の責任者の座談会が開かれ、席上歴史檔案の編集、出版の問題が提出され、討議された。また第六次五か年計画において、檔案の整理は、社会科学研究の重点項目の一つになっており、檔案館と図書館、博物館その他研

究機関の業務の分担と協力関係、檔案の担当者と歴史資料の担当者との共同作業の問題、さらに出版、印刷の条件や設備の改善、職員の質、収集基礎業務等の課題が提出されている。

檔案に関する學術誌「歴史檔案」は一九八一年二月創刊され、季刊で刊行されている。中国第一、第二歴史檔案館の共同編さんである。

おもに明清時代および民国時代の歴史檔案を対象とし、その内容は、政治、軍事、社会経済、中外関係、文化教育、科学技術等にわたっている。これらを利用した研究論文、考証、国内檔案館の紹介、国外で所蔵されている中文檔案の解説などを掲載している。その他「檔案学通訊」等の雑誌も刊行されている。一方、一九八一年一月には、北京で中国檔案学会成立大会と第一次學術討論会が開催され、二五〇人の代表が参加した。学会の章程（規約）「中国檔案学会三年學術活動計劃要点」などが成立した。檔案業務担当者、研究者を組織し、學術活動を展開する。檔案に関する知識を普及させ、国外の研究成果を紹介する。檔案研究者の育成をはかる。関係圖書の編さん刊行、国際交流活動を活発にし、檔案事業発展のために貢献すること等が決められている。その後さらに、一九八四年二月には第二回學術討論会が南京で開かれた。

職員の養成機関については、主要なものとして現在中国人民大學に檔案系（学部）があり、武漢大學の圖書館学系を母体とした図書情報學院の檔案学系があげられる。

つぎに中国の檔案館についてみると、中央一級檔案館として左記のものがある。

①中央檔案館 党の革命歴史檔案と、建国以後の党（中国共産党）と政府の中央機関等の永久保存の価値のある檔案を保管。一九五九年に創設された。

②中国第一歴史檔案館 明清時代の中央機関の檔案を保存。

③中国第二歴史檔案館 北洋政府、国民党政府、汪精衛政權等の中央機関の檔案を保存。

さらに各省、市、自治区、県その他にはそれぞれのクラスの檔案館が設置されており、各時代の省、県の機関の檔案を保存している。また専門の檔案館が、政府機関に設けられている。例えば、国防部に所属する軍事檔案館、地質部の地質資料檔案館である。一九八三年現在、二九の省、市、自治区にすべて設置されており、県、市各種のもの合わせて二八〇三館となっている。各檔案館では、資料の収集保管、整理、利用、編さん刊行などの業務とともに、各種の啓蒙活動を展開している。展示会を開催し、学会や新聞、ニュースで宣伝し、學術誌を紹介のせるなどである。年間の利用者は一六万人、利用資料二七〇万件といわれる。さらに中国第一、第二歴史檔案館についてみることにしたい。

## (二) 中国第一歴史檔案館

明清時代の歴史檔案を管理する機関。中国の檔案館の中で最も早く設立され、所蔵する資料も一〇〇〇万件以上といわれており最大である。その前身は、解放前の一九二五年に設けられた故宮博物院の文献部であった。その後一九二七年に掌故部と改称、一九二九年には文献館となった。そのさい故宮の各処に

分散していた檔案を集中・整理して統一的に保管し、同時に外部に流出したものを収集、これが現在の基礎となっている。当時の資料は五〇〇万件といわれる。一九五一年、故宮博物院檔案館と改称され、明清時代の檔案を専門に管理することとなった。一九五五年、国家檔案局の直屬として第一歴史檔案館となる。一九五八年また名称が変わり、明清檔案館となった。翌一九五九年、さらに中央檔案館に併合されて、中央檔案館明清檔案部としてその組織の一部になっている。一九六九年再び故宮博物院の管轄になり、故宮博物院明清檔案部と称した。一九八〇年四月、再度国家檔案局の指導下に入り、中国第一歴史檔案館となった。このように、設立以来名称や管轄機関は幾たびか変遷があったが、明清時代の檔案を扱う専門機関であるという性格や任務は変わらない。所蔵資料については、明代の主として天啓から崇禎年間のもの数千件に対し、清朝の中央と地方機関の檔案九〇〇万件余とぼう大である。種類としては、詔、誥、敕および奏、表、箋さらに咨、移、関文のほか函、電、照、單、図、冊、札等といわれるもの一〇〇種以上にのぼる。漢文のもの以外に満文(満洲語)二〇〇万件、他に蒙文(蒙古語)、藏文(チベット語)のものも多少あり、英文、法文(フランス語)、俄文(ロシア語)など外国語の資料も所蔵されている。これらの内容は、政治、経済、地震災害、宮廷生活等多岐にわたり、明清時代および近代史の資料の宝庫であり、一次史料として価値が高い。現在全資料の二分の一にあたる漢文資料のものについては、大部分整理が完了、目録、分類、排架などの作業がお

わり利用に供されている。資料群としては、内閣大庫のものが最も多く二〇〇万件、軍機処六〇万件、宮中四〇万件、内務府、宗人府、六部等七四のグループに分けられ、各群の中はそれぞれの種別、資料の性格に応じた分類方法をとっている。年代順のもの、事項や主題別のあとを年代順にしたもの、組織部署別ののち年代順としているもの、または人名、地名などの固有名詞を直接出すもの等、各群で異なる。

中国第一歴史檔案館は、故宮の西華門内に位置しており、緑にかこまれた宮殿風の建物である。一九七〇年代に新築されたといわれる書庫内部は広く、これは一九六〇年代に分かれており総計一万平方米といわれる。大きなロッカーが通路をはさんで並べられており、スペースはゆつたりとしている。貴重なものについては、各ロッカーの扉、ひき出しの中に木製の箱が入れられて、さらに布に包まれた文書が収められている。保管状態もなかなか行きとどいていて見受けられた。職員数一五〇人余、六つの部署に分かれている。①弁公室②研究部③管理部④満文部⑤編輯部⑥技術部である。利用者は国内の研究者、学生もあり、国外からの利用者では日本人が多いことである。一九八三年は四八四機関(国外一八機関)六八〇〇人、資料一〇〇万件、マイクロ複写一万五二〇〇件の利用があった。出版活動は、解放前の一九二八年からはじめられている。一九三八年までに六八種四三二冊が刊行された。「籌弁夷務始末」「掌故叢編」「文獻叢編」「史料旬刊」「清光緒朝中日交涉史料」等のほか、解放後のものは一七種六〇冊「中法戦争」「辛亥革命」「洋務運動」「清代檔案史料叢編」等である。現在「康熙朝漢文硃批奏摺」

「第二次鴉片戦争檔案史料」「辛亥革命檔案史料」などがマイクロフィルムや複製本により刊行されはじめている。資料のマイクロー化はこれまで五万件がおり、継続して積極的にすすめられる予定である。課題としては、他の図書館で所蔵している地方文書、博物館の甲骨文などの資料の所在を把握すること、所蔵目録、利用案内の作成、複写サービスを拡大し、檔案の価値を宣伝する、閲覧室の拡充、担当人員の強化、組織の調整をはかり、民族文化水準の高揚につとめ四つの現代化に貢献するということが示されている。

### (三) 中国第二歴史檔案館

ここでは、中華民国時代の各種檔案一二〇万件を集中保管している。もと南京史料整理処といわれていたものの後身で、中国科学院近代史研究所の所管であり、一九五一年二月南京に設立された。解放後、国民党政府の国史館と中国国民党党史史料編纂委員会の歴史檔案を接収し、その基礎の上でできたもので、その後もひき続き収集活動が行われた。一九六四年四月以後国家檔案局に所属し、中国第二歴史檔案館と改称した。中国文化大革命後の一九七七年、中国科学院から分離独立した中国社会科学院近代史研究所に属し、さらに一九七九年一月、再び国家檔案局の管轄に入った。所蔵資料の範囲は、一九二二年辛亥革命後孫文が建立した中華民国臨時政府から一九四九年中華人民共和国成立までの中華民国の各時期の政府の中央組織、および直屬機関の歴史檔案である。資料は八〇〇群に分けられ、長さにするると二万四〇〇〇米にも達するといわれる。一九六六年

中国文化大革命開始前、檔案類はすでに一通り整理されていた。一九七六年までの一〇年間は、当然のことながら業務は中止された。ここに所蔵している資料は次のとおりである。①南京中華民国臨時政府、広州大本営と広州国民政府、武漢国民政府のもの。②北洋政府時期の檔案、七一グループ、一〇万件。③国民党政府時期の檔案、五九三グループ。これが全檔案の八〇％を占める。国民党政府の行政院、立法院、司法院、監察院、考試院、国民大会等のもが含まれる。つまり国民政府の内政、外交、軍事、財政、金融、文化、教育など各分野の情況を記した基本資料である。④抗戦時期の汪精衛政権のもの、八七グループ。⑤著名な人物の個人の檔案、三四グループ。これらのほか辛亥革命運動関係の檔案も所蔵。

職員数一三〇人、組織は①管理部、②資料編輯部、③資料研究室、④技術部である。書庫の総面積一万平方米、金庫のような扉が入口にとりつけられており、スチール製の書架に文書綴、袋入りの資料が並べられている。移動書架もとり入れられて、第一檔案館に比べると資料の性格も違うためか、機能的であるように思われる。現在編さん中のものは、「中華民国史檔案資料彙編（一九一一—一九四九）」が一九七九年より出版。現在「辛亥革命」「南京臨時政府」まで刊行されている。「中華民国史檔案資料叢刊」一九八〇年より出版開始、「五四愛國運動檔案資料」「直皖戦争」までが出されている。またこのような資料の一部は、台湾の国史館、中央研究院にも所蔵されており、最近、両方の資料を補い合った共同研究、資料集編さん刊行の呼びかけ、利用への便宜をはかる旨の表明が台湾の研究者に対してな

された。八一〇年計画で目録の編さん、資料のマイクロ化が進められ、利用案内の作成、閲覧室の拡大なども課題となっている。

\*「国立国会図書館月報」二五八号（一九八二年）、二七六号（一九八四年）  
主要参考資料

○赤子「我国檔案館概述」歴史檔案 一九八二年三期

○陳恭祿「中国近代史資料概述」一九八二年 中華書局

○趙越「中国歴史檔案沿革初探」遼寧大学学报 一九八三年四期

○「中華人民共和国法規彙編」一九五六年一月六月、一九五七年七月—十二月

○「中国檔案学会成立」歴史檔案 一九八二年一期

○「全国檔案工作会議在北京召開」歴史檔案 一九八三年二期

○「歴史学年鑑」一九七九、一九八一年 檔案館の項

○「史学情報」一九八二、一九八三年各期 檔案館の項

○「中国百科年鑑」一九八二、一九八三年、一九八四年 檔案館の項

○劉子揚「故宮明清檔案概論」清史論叢 一集 一九七九年

○朱金甫「故宮明清檔案部所藏檔案的過去和現在」清代檔案史料叢編 三輯 一九七九年

○李鵬年「故宮明清檔案部所存主要檔案述略」清代檔案史料叢編 三輯 一九七九年

○李鵬年「内閣大庫—清代最重要的檔案庫」故宮博物院院刊 一九八〇年二期

○神田信夫「中国第一歴史檔案館訪問記」東方学 六一輯 一九八一年

○単士魁「中国第一歴史檔案館」歴史檔案 一九八一年一期

○「中国第一歴史檔案館所藏檔案編輯出版情況一覽表」歴史檔案 一九八二年二期

○「中国第一歴史檔案館一九八三年檔案史料編訳工作綜述」歴史檔案 一九八三年二期

○鞠徳源「明清檔案管理走向現代化」光明日報 一九八四年九月一七日

○陳典唐「中国第二歴史檔案館」歴史檔案 一九八一年二期

○施宣岑「関于〈中華民國史〉檔案史料的收集和整理」歴史檔案 一九八三年二期

○慶軒「台湾所藏民国檔案」歴史檔案 一九八四年二期

○「中国現代史研究資料・文献紹介(3)刊行された檔案資料」中国研究月報 一九八四年一〇月

○「中国第二歴史檔案館意向向台湾学者開放」人民日報 一九八四年四月一日

（なかはら・ますえ アジア・アフリカ課）

（三二ページより続く）

女天、孫龍太郎承家、頃日弘道會員相謀將建碑不朽先生学徳功績、使余作銘余受先生薰陶三十年、不可以不文而辭、乃據其家譜及土屋伯毅所著伝、更加余所知為序、係銘曰、  
道出於天 弘之在人 世迷私利 多失本原 偉矣先生 雙手廻瀾 夙修厥徳 乃哲乃賢 弘道創会 誘導国民 和漢洋学 研究深淵 著書充棟 闡明彝倫 死而不死 遺徳千年  
明治三十七年七月

弘道会副会長從四位勳四等南摩綱紀撰  
（いがらし・きんざぶろう 人文課）